



金融教育の現場レポート



東京都立蒲田高等学校

東京都公民科・社会科教育研究会 事務局長

浅川貴広 主任教諭

**リスクを学び、
損をしない術を身につける**

現在、公民科の教員である浅川先生は、蒲田高校では3年生の必修科目となっている政治・経済を担当しています。公民科の科目のうち現代社会や政治・経済では、金融に関連する学習内容があり、浅川先生はこういった内容に関連づけて金融教育を行うことの重要性を感じています。

「かつてのように銀行にお金を預けてさえいけば資産が増える時代は終わりました。これからは預貯金以外の金融商品についても、資産運用の選択肢として考える能力が必要です。実際に、高校を卒業すれば、金融商品取引の勧誘を受けることもあ

るでしょう。また、2022年4月には成人年齢も18歳に引き下げられますので、生徒たちの生活に直接的に関わってくる金融教育や消費者教育には力を入れていくべきだと考えています」。

蒲田高校での政治・経済の授業で、浅川先生が金融教育の分野から取り入れているのは「資産運用におけるリスクとリターン」です。株式などへの投資は利益が出る場合もあれば、損失が出る場合もあります。この授業では、金融商品ごとの特性を理解し、好景気・不景気といった景気の状態を踏まえたうえで、資産を株式投資と貯蓄に分配するポートフォリオを組むシミュレーションを行い、リスクとリターンの関係を学ぶことが目的です。

身近なバブル時代を題材に 景気変動の理解を深める

政治・経済の授業で、浅川先生は教科書の目次の順番通りに教えるのではなく、関連する学習内容を組み合わせながら授業を組み立てていきます。例えば、日本国憲法で基本的人権を教えるときには、他の単元で登場する社会保障や労働問題、少子高齢化といった内容も加えていくのです。こうすることで生徒たちは、教科書に別々の単元で記載されている学習内容を関連づけて学ぶことができます。

「リスクとリターン」という学習内容についても、その名の通りの単元や項目が教科書に記載されてはいません。景気変動、金融、そして日本の戦後の経済史といった教科書の学習内容を組み合わせながら、指導

リスクとリターンの関係を学ぶ。 現実の経済の動きを題材に 資産運用を疑似体験

—— リスクを判断する力を養い「だまされない術」を磨く ——

「金融教育」は社会のなかで「生きる力」を育むことを目的として行われる教育です。このコーナーでは、金融教育の授業がどのように進められているのか、教育現場に立つ先生や授業を受ける生徒の姿をレポートします。今回は東京都立蒲田高等学校（以下、蒲田高校）で公民科の政治・経済を教える浅川貴広先生を取材しました。浅川先生は資産運用のシミュレーションを通じて、景気変動と金融の知識、そしてリスクとリターンの関係を体感する授業を展開しています。



浅川貴広 主任教諭



浅川先生が担当する政治・経済を学ぶ蒲田高校の3年生たち。声に出して発表することも学習内容を定着させるには有効だ。

案を作成しているのです。リスクとリターンは2時限で構成されます。リスクとリターンの関係を学ぶ前提となる「景気変動とリスクの関係」、特に景気変動に伴う金融商品とリスクの関係を学んだうえで、資産運用の疑似体験を行うのです。

まずは、好景気には株価が上昇し、不景気には株価が下落するといった経済的要因が影響しつつも、すべての株価が必ずしも同じ動きをするのではなく、景気の波に左右されやすい「景気敏感株」、左右されにくい「デیفエンシブ株」などの種類があることも紹介していきます。

「まずはとにかく、好景気はどういう状況か、不景気はどういう状況かを理解することに徹します。好景気はかつてのバブル経済を例にして解説します。最近ではバブル時代である1980年代のファッションやダンスが話題になっているので、高校生にもイメージしやすいですね」。

そして「資産運用におけるリスクとリターン」の授業が行われます。生徒たちは自分の判断で、設定された100万円の手元資金を株式投資と貯蓄に配分し、資産運用のポートフォリオを組むシミュレーションに取り組みます。

株式投資は二つの企業を想定し、手元資金の配分を考えます。企業Aは「景気敏感株」の工業機械メーカー。景気がよくなる则需要が増え大幅な増益が見込めますが、不景気になると大幅に減益する可能性もあるリスクの高い株式銘柄です。一方の企業Bは「デیفエンシブ株」の医薬品メーカー。

カー。需要が景気の変動に左右されにくい一方で、大幅な増益も見込みづらいリスクの低い株式銘柄です。

88年と98年にタイムスリップし、資産を株式投資と貯蓄に配分

生徒たちは4回のシミュレーションを行うしていきます。

シミュレーション①～④のワークシート

【シミュレーション① 今現在 (1時目)】		
投資額	変動	元金+収益額
企業A	万円	万円
企業B	万円	万円
貯蓄	万円 0.01%の金利	万円
合計		
【シミュレーション①の理由】		
【シミュレーション② 好景気】 1988年1月		
投資額	変動	元金+収益額
(例)	50万円 2倍になった(50万円×2)	100万円
企業A	万円	万円
企業B	万円	万円
貯蓄	万円 3%の金利	万円
合計		
【シミュレーション③ 不景気】 1998年1月		
投資額	変動	元金+収益額
企業A	万円	万円
企業B	万円	万円
貯蓄	万円 1%の金利	万円
合計		
【シミュレーション④ 今現在 (2時目)】		
投資額	変動	元金+収益額
企業A	万円	万円
企業B	万円	万円
貯蓄	万円 0.01%の金利	万円
合計		
【シミュレーション①から変化した(変化しなかった)理由】		

まずシミュレーション①は、2018年現在においてどのような資産運用をするかを考えます。浅川先生は「2012年末に安倍首相が就任し、アベノミクスに対する期待から株価が上昇しましたが、今年と比較的小幅な変動となっています。緩やかに経済成長が続く現在において、どのようなポートフォリオを組むのかを考えてみましょう」と問いかけます。

このとき、まだ、生徒たちはリスクとリターンの関係を学んでおらず、「ハイリス

ク、ハイリターン！全額を景気敏感株に投資！」と意気込む生徒もいます。

次のシミュレーション②では、バブル経済に沸く、好景気の1988年1月での資産運用を考えます。株価が2倍、地価の急激な上昇、3%〜4%のGDP成長率、銀行利率3%といったバブル期の経済状況について理解し、当時にタイムスリップしながら、ポートフォリオを組んでいきます。

シミュレーション①では100万円を株式投資と貯蓄に配分するだけで、投資金額の増減を算出しませんが、シミュレーション②では、サイコロを振って、株式への投資金額がどのように増減したかを決めていきます。バブル期の経済状況を前提としているので、景気敏感株の企業Aは最大で株価が3倍になり、ディフェンシブ株の企業Bも最大で株価が2倍になるとの前提を置



いています。一方で、サイコロの目によっては「株価が半分になった」という設定もあり、好景気でも株価が下落するリスクが設定されています。

<p>【シミュレーション② 好景気】1988年1月 ＜企業A収益結果＞</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 株価が半分になった。 ● 株価が変動しなかった。 ● 株価が1.5倍になった。 ● 株価が1.5倍になった。 ● 株価が2倍になった。 ● 株価が3倍になった。

<p>【シミュレーション② 好景気】1988年1月 ＜企業B収益結果＞</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 株価が半分になった。 ● 株価が変動しなかった。 ● 株価が変動しなかった。 ● 株価が1.5倍になった。 ● 株価が1.5倍になった。 ● 株価が2倍になった。
--

ちなみに、貯蓄についても設定された銀行利率で収益を算出します。

シミュレーション③は、不景気だった1998年1月の設定です。バブル経済の



崩壊による株価の大幅な下落、消費税増税(3%→5%)に伴う個人消費の落ち込み、銀行利率1%などの経済状況を学びつつ当時にタイムスリップしながら、ポートフォリオを組んでいきます。

サイコロの目の設定にも、不景気が反映されており、景気敏感株の企業Aには「投資先が倒産し、元金を含めて収益0」といった設定もあり、景気敏感株はリスクの高いことを表しています。一方のディフェンシブ株の企業Bは、最悪の場合でも「株価が半分になった」という設定です。生徒たちは、株式投資では銘柄によるリスクの大きな違いを実感していきます。

<p>【シミュレーション③ 不景気】1998年1月 ＜企業A収益結果＞</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 投資先が倒産した(元金を含めて収益0)。 ● 投資先が倒産した(元金を含めて収益0)。 ● 株価が半分になった。 ● 株価が半分になった。 ● 株価が変動しなかった。 ● 株価が2倍になった。

<p>【シミュレーション③ 不景気】1998年1月 ＜企業B収益結果＞</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 株価が半分になった。 ● 株価が半分になった。 ● 株価が変動しなかった。 ● 株価が変動しなかった。 ● 株価が変動しなかった。 ● 株価が1.5倍になった。

「授業はものすごく盛り上がりがあります。生徒たちは一喜一憂しながらサイコロを振っています。シミュレーションをしながら、『さっき、景気敏感株で大損したから少しは貯蓄に回さなくちゃ』といった言葉が聞こえてくるとうれしいですね」。

シミュレーションを通じて

リスクへの意識の変化を体感

そして最後のシミュレーション④に

入ります。シミュレーション①と同様に2018年現在の経済状況での資産運用を行います。

「現実には日本で起きた好景気と不景気における資産運用を疑似体験したうえで、現在の経済状況における資産運用をもう一度行ってみることに意義があります。ポートフォリオの組み方を変えたのであれば、どのように変えたのか？なぜ変えたのか？を比較分析させ、発表させます。生徒たちは、自分の判断にリスクへの理解が関係していることに気づきます。①と④で考え方は変わってよいのです。リスクを学び、行動を変える。それが学びの成果であること、を体感させるのがこの授業の目的であり、シミュレーションでの『儲けた』『損した』は重要ではないのです」。

授業結果では、シミュレーション①と④でポートフォリオの組み方を変えた生徒は全体の4分の3。貯蓄の割合を増やし、リスクの高い景気敏感株への投資を抑える傾向が顕著に表れました。

生徒たちからは、「投資するためには、その時々々の経済状況を確認することが大切だと感じた」、「景気敏感株はリスクが高すぎるので多額の投資はできない。ディフェンシブ株で少しでも安定した利益が欲しい」といった感想が聞かれました。この授業を通じて、生徒たちのリスクとリターンに対する意識は高まったのです。

授業の終盤で、生徒たちはポートフォリオの内容を黒板に書き、発表します。

「蒲田高校の生徒は本当に個性が豊かです。ポートフォリオの組み方もバラエ

今回の指導案

- 生徒たちに身近な日本の経済史を設定することで、より現実性を持たせた
- シミュレーションを行うごとに生徒たちがポートフォリオを考え直す機会を設けた

【シミュレーション①】今現在(1時間目)
まずは、今現在ではどのような資産運用をするかを考えます。
2012年末に安倍首相が就任して以降、いわゆる「アベノミクス」に対する期待から株価が上昇しましたが、今年は比較的小幅な変動となっています。緩やかに経済成長が続く現在において、どのようなポートフォリオを組むのか考えてみましょう。理由も書いてください。

【シミュレーション② 好景気】1988年1月
＜主な出来事＞
・東北新幹線・上越新幹線開業する。
・ドラゴンクエストIIIが社会現象になる。
・カラオケボックスが人気になる。
＜流行語＞
・セクハラ
・キープする
・おたく族



【シミュレーション④】今現在(2時間目)
最後は、①～③を踏まえて、今現在ではどのような資産運用をするかを考えます。
①で組んだポートフォリオから(②や③を受けて)変化しても構いませんし、変化しなくても構いません。その理由も書いてください。
→まとまったら黒板に書いてもらいます。

【シミュレーション③ 不景気】1998年1月
＜主な出来事＞
・冬季長野オリンピック開催。
・サッカーW杯仏大会に日本が初出場。
・映画「タイタニック」ブーム。
＜流行語＞
・キレる
・ビビビとききました



- ①資産運用のポートフォリオ作りは生徒一人ひとりで取り組むのが基本。浅川先生は生徒の様子に目を配りサポートをする。
- ②授業の最後に取り組んだ成果を板書。考え方や取り組みの結果が人それぞれで異なるのを知ることにも意義がある。
- ③シミュレーションを体験した生徒たちは、学習内容への興味が授業中続き、真剣な表情で集中する。

ティに富んでいます。この授業を通じて、自分とは違う考えがあることに気づくことはとても大切なことだと思います。

授業の最後に浅川先生は、リスクとリターンには関係性はあるが、必ずしもイコールではないことを強調します。

「生徒たちは『ハイリスク・ハイリターン』を『高いリスクを取りさえすれば、高い利益を手に入れることができる』と思いがちですが、そうではありません。好景気だからといって、景気敏感株の株価が右肩上がりに急上昇するとは限らないのです。そして『ローリスク・ハイリターン』は存在しません。世の中には、甘い儲け話にだまされてしまう事例が少なくありません。

将来、株式投資する機会が来たら、必ずリスクについて考えるよう促しています。安全に大儲けができる金融商品などありません。なぜ、その金融商品は人気があるのか?どんなリスクがあるのか?さまざまな視点を持って、物事を批判的に考える力が必要です。政治・経済をはじめ、公民科の科目を学ぶ大きな目的はそこにあると私は考えます」。

リスクとリターンの学びは 長期的な視点を養う機会

浅川先生のこの授業は、金融広報中央委員会が発行した「金融教育プログラム」[全面改訂版]の「リスクとリターン」を体験してみよう! (P191~198) という指導案をベースにしています。この指導案は20歳から定年時までの8回にわたり、設定された資金を株式投資と貯蓄に分配して

いくものです。振ったサイコロの目に応じて投資額の増減が決まり、定年までの資産運用をシミュレーションしていきます。

浅川先生は、日頃の指導経験を踏まえ、この指導案に独自の工夫を加えました。まず、設定を生徒たちに身近な日本経済史の出来事とすることで、より現実性を持たせたこと。また、シミュレーションを行うごとに、生徒たちがリスクとリターンを肌で感じながらポートフォリオを考え直す機会を設けたこと。この2点を特に工夫したといます。その成果が今回の記事で紹介した授業内容なのです。

「大切なのは内容を抽象化しないことです。現実には日本で起きた80年代のバブル経済、90年代の不景気といった具体的な経済状況、株の銘柄の特徴を理解したうえで資産配分をシミュレーションしていくことで、リスクとリターンの関係への理解を深めることができます」。

浅川先生は、リスクとリターンの授業は、生徒たちが長期的な視点を持つうえで有効だと指摘します。

「資産運用では長期的な視野が必要です。この授業では数十年の周期で景気と不景気が繰り返していることや長期的な株価の変動について学びます。本校の生徒には『長期的な視点で物事を考える能力』を養ってもらいたいので、この授業はとても重要です。金融教育にはさまざまな可能性があると感じています。私は今後も授業を進化させながら、金融教育に力を入れていきたいと考えています」。